

(2)新宮市立王子ヶ浜小学校の取組

山本 健一 (新宮市立王子ヶ浜小学校 教務主任)

- 1-2.王子ヶ浜小学校は、昨年二つの小学校が統合してできた学校です。海岸線から 530mと海に近い場所に建っています。津波避難場所は標高 20.6mの校舎屋上を設定し、約 1,000 人が避難できるスペースが確保されています。ただし、もし校舎が損壊、または危険と判断した場合は、近くの近大新宮高校のグラウンドへ避難することになっています。そこは校舎屋上からも見える標高 37.5mの高台です。
- 3.統合により校舎が大規模改修されました。そのため、これまでの教室配置や避難経路に変更が生じたため、月に一度のペースで避難訓練を行っています。毎回訓練後は反省を持ち寄り、気づいたこと、改善できるものはすぐに修正をかけ、次の避難訓練に反映させています。そうして一つ、また一つと避難訓練計画が更新されることによって教師のみならず、児童の動きも変わっていきました。
- 4.統合により小中一校ずつの校区となったため、昨年度より小中連携事業を強化しています。防災教育分科会では、これまで備蓄倉庫の確認、避難訓練方法の模索、防災の授業案交流などが行われてきました。小中の垣根を越えて有意義な意見交流がされています。話し合われた内容は全体会で報告・提案され、持ち帰り検討されます。そこで実践されることになったのが、二次避難所である近大新宮高校グラウンド方面への避難訓練でした。
- 5.学校の正門をスタートし、避難場所まで走りに走って 6~7 分かかりました。途中からずっと坂道が続くため 6 年生でも休まず駆け上がるのは大変でした。しかし、全学年で実施したことにより、実際どれくらいの時間がかかるのか、またどんな危険性があるのか、を確認できた避難訓練となりました。
- 6.今年度、新宮市の防災対策課にお願いし、防災教育についての校内研修を行いました。まず、過去の大地震による津波被害の様子や、新宮市津波ハザードマップの説明を受けました。あらためてハザードマップがどのように、そしてどんな想定で作成されているのか細かい部分まで知ることができたのが大きかったです。
- 7.後半は地震津波想定を図上訓練を行いました。指定された教室や場所で大地震が起きたことを想定し、その教室の配



置や備品などを踏まえ、「どんな危険が潜んでいるのか」「避難のしかたはどうするのか」「教師は何を考え、どう行動しなければならぬのか」などを話し合いました。

8.そして「事前に対策を講じることができるものは何か」、それぞれのグループで話し合った内容を発表し、全体で共有しました。様々な視点で考えると、たくさんのことが見えてきます。出された意見は防災安全部で「早急に対処すべきもの」と「対応を考えていくもの」に分類し、取り組みを始めています。2学期の授業参観は全クラス防災の授業を行っています。2013度は12月2日(月)に実施、各クラス防災教育の手引きの新宮市版をもとに、児童の実態に応じてアレンジを加えたり、自前の教材を作成したりして授業しました。王子ヶ浜小学校は全クラス50インチのモニターが教室にありますし、41台のiPadを導入して頂いているので全クラスこの二つを利用した提案授業にもなりました。どのクラスもたくさんの保護者、地域の方々であふれ、当日はワーキング会議のメンバーや教育委員の方々にも参観いただきましたので、総勢400名を超える参観人数となりました。『学校で防災の教育をしてもらえるのはありがたい。』『大人の私たちも勉強になりました。』という保護者からの感想も多数いただいています。2014年度は12月7日に、日曜参観として実施しました。一限8時30分からという朝早い時間での授業参観にも関わらず、ご夫婦またはご家族で来られる姿が多く見られました。特にお父さんの多さにはびっくりしました。『今回は日曜日の授業参観だったので、とてもありがたかった。』という声を本当にたくさん聞かせていただきました。授業後、参観人数を集計しますと、ここ十数年で最高人数の313名にまでのぼりました。防災教育という意味でも、たくさんの保護者の方々に参観してもらえたことは良かったと思っています。

9.防災教育の取り組みを通して我々教師は、防災意識が高まりました。避難訓練の仕方や、学校備蓄、日ごろから持つ心構えにまで目が向くようになりました。クラスでも機会を設けて、意識的に防災の話を子どもたちにもするようになっています。3年前の台風12号による紀伊半島大水害の経験も大きいのではないかと思います。また、主体的に防災教育を行うようになりました。その必要性を教師自らが感じ、防災の授業を手引きになぞってするのはな

現職教育(新宮市防災対策課)



8

教師の変容



- ・防災意識が高まった。
- ・主体的に防災教育を行うようになった。
- ・家庭・地域に働きかけるようになった。

10

児童の変容



- ・防災意識が高まった。
- ・行動が迅速になった。
- ・家庭で防災の話をするようになった。

11

保護者・地域の変容



- ・防災意識が高まった。
- ・地域主催の避難訓練の実施。
- ・学校(避難)施設への関心が高まった。

12

課題、そして今後...



防災教育を継続することが重要
災害から生き抜く力を見に付ける

13

く、児童の実態に合わせて工夫・改善して取り組んでいます。昨年・今年と土砂災害に踏み込んで授業する学年も出てきています。そして、家庭・地域に働きかけるようになりました。防災の授業のことを通信などで知らせたり、家で一緒に考えてもらったり、また学校ホームページに掲載したりして、子どもばかりでなく家庭・地域に、防災について積極的に発信・啓発することができています。

10.児童は、教師同様防災意識が高まりました。今年、休み時間に起きた震度 1 程度の地震の際、素早く机の下に身を隠したり、運動場の中心に集まりしゃがみこんだりする姿が見られました。教師の指示がなくても自分たちで行動することができるようになってきています。また、行動が迅速になりました。避難訓練のときに、机の下に潜り込む、避難中の動き、整列も速くできるようになりました。これは普段の学習活動のときなどにも生かされているように感じます。そして、家庭で防災の話をするようになりました。授業で習ったこと、知ったことを家でも話しているようで、非常持ち出し袋を用意したり、避難場所を決めたりしているようです。家族の一員として話の輪に入っているのがわかります。

11.保護者・地域の方々は、やはり防災意識が高まりました。学校に足を運んでくれる保護者・地域の方々がとても多いです。事前に防災の授業とお知らせしているので、授業内容を分かった上で授業参観に来てくれているのがわかります。「学校ではどんなことを学んでいるのか」、「どんな備えをしておかなければならないのか」、興味関心があるように感じています。また、地域主催の避難訓練が多数実施されました。それぞれの町内会で避難訓練や備蓄倉庫の確認も行われています。最終的に学校の屋上に避難する訓練も何度かありました。年々参加する人数も増えているそうです。そして、学校避難施設への関心が高まりました。『どうやって屋上まで避難したら良いのか。』、『一度、屋上に上らせて欲しい。』、『地震の際にロックが外れるキーボックスはどこにあるのか。』という問い合わせの電話をいただいたり、直接学校に来られたりする方もいます。特に地域のお年寄りの方が多いような気がします。万が一のときの避難を想定しての行動だと感じています。

12.学校から児童、児童から保護者・地域へと波及することで防災意識が高まってきました。そう考えると学校の役割はとても大きいと思います。ですから、今後も防災教育を継続させることが重要だと考えています。そのためにも各学年で年間計画を作成し、毎年何らかの形で防災教育に関する実践を重ねていきたいと思っています。防災の授業参観が恒例となり、子どもたちと保護者・地域のみなさんが一緒に考え、活動できるような授業を展開していくことも必要になってくると思います。また、子どもたちに災害から生き抜く力を身に付けさせたいと思います。学校にいるときだけではなく、自宅などの学校外にいるときにも自分で判断し、適切な行動がとれなくてはなりません。災害から身を守ることができるようにするための知恵を身に付けさせるためにも、身近で具体的な状況を提示し、そのときどうするかを考えさせるような授業にも取り組み始めましたが、より一層充実させていきたいと思っています。

幸い、王子ヶ浜には『あなたが頑張っているから私たちも頑張るよ』、『子どものためなら力を尽くそうよ』と同じ思いを持って防災教育を進めてくれる教員がたくさんいることがなにより心強いです。今後も防災教育を校内研修 3 つの柱の 1 つにおき、近道をするのではなく、地道に取り組み、積み上げていきたいと考えています。